

「はあ、やっと終わった」

今日の特訓もようやく終わり、雄二はつぶやく。

「しかし、お前たちも結構体力ついたなあ。こんだけやつてもまだまだぶっ倒れなくなったもんな」

確かに以前よりも二人の特訓の時間は増えていた。つまりそれは、二人がなかなかばてなくなってきたということだ。修行の内容をみても明らかに能力が強くなり、その使い方もうまくなっている二人を見て、慎は「どうだ、そろそろもう少し特訓のレベルを上げてみないか？」と提案した。

「あげるって、どんなことをやるんですか？ 次のステップでは」

「え？ そうだなあ。うーん。まだ考えてないや」

「なんすか、それ！」

「いやー、ごめん。この修行であと半年くらいは特訓すると思ってたからさあ。でもよそうよりお前たちのノビが早かったんだもん」

「お、ってことは俺たち才能に満ち満ちてるってことです

か？」

赤羽の発言に、雄二も、そして淳ですらそう思ってしまった。しかし慎は「いや」と否定して、続けた。

「お前たちの才能があったっていうよりはだな、どっちかっていうと、お前たちの志がものすごく高いからって感じかな。いつもいっているとおり、能力ってのは心に依存するからな。だからその志が高く、『強くなりたい』って思いながら修行してるといいんだな。それにお前たちは以前、かなりの強者たちと戦っただろ。それによって、どのくらい強くなりたいかとか、明確に見えているんじゃないか？ だからそのおかげで、そのはっきりした目標のおかげで能力を成長させやすいんだろう。それに以前の事件の最中に、実際に自身が襲われてるっていう状況下で修行してたから、そのときには今よりもさらに成長の伸び率が高かったからな。そのおかげもあって、今結構強くなってきたんだ」

「へえ、じゃあ俺たちが慎先生を抜かすのも時間のもんだいっすね」

「それならいいんだけどな。でも、悪いんだが、成長スピー

ドだけで言ったら当時の俺のほうが早かったな」

「えー、そうなんすか」

「ああ。その代わり、命のやり取りをお前たち以上にやっていたからな」

「僕たち以上……ですか」

「まあなあ。それにお前たちと違って自分の身は完全に自分だけで守らなきゃならなかったからな。強くなってなかったら、この場にいなかったわな」

「でもさ、このペースで行ったら、絶対慎先生は抜かせるって」

「ほう、雄二。その自身の根拠を聞こうか」

「だってさ。修行のときとか、この前の慎先生のバトルとかで先生の实力は結構見てるけど、なんかそれほど上って気がしないんだよね」

雄二のその発言を聞いて、慎ははっはっはと笑い出す。そして淳の「そんなことないんじゃない……」という言葉の続きを言う前に、ついには大笑いし始めた。

「あっはっはっはっは。言ってる言ってる。いうだけな

らタダだしな。はっはっは」

「ちよ、そんなに笑うことないじゃないすか」

「だって、おまえ。あっはっはっは。俺、まだ、プププ。一度も、お前らの前で、本気は出してなかったと思うぞ」

「へ？ そうなんすか？」

「ああ。俺の記憶違いじゃあなければな。それに本気出しても、お前らじゃあ分かんたろ、どういう風に能力者としてうまく戦ってるのか」

「確かに、分からないかも知れないです……」

「いや、分かりますって。淳もそんなこと言うなよ」

「だってさ、雄二。仮に慎先生が相手と高度な心理戦をしながら戦ってて、それが一見ただの弱い技の出し合い立ったりしたら、僕たちだったらそれは見たままに受け取っちゃうじゃない？」

「うーん、そうかなあ」

「少なくとも僕自身はそうだと思う。裏に隠れた心理戦なんて、読めないもん」

「そんなことあるんすか？ 慎先生」

「まああるな。実際強者と戦うときは弱い業とかを使って相手の隙を作っていかなきゃいけないことなんてしょっちゅうだし、心理戦もよく使う」

「ね、雄二。だから仮に慎先生が本気で戦ってても、まだ僕らにはそのすごさが分からないんだよ」

「そんなことないと思うけどなあ」

「ま、そんなことどっちでもいいだろ。お前たちが戦ったブレイザ……、なんだっけ。まあともかくそのリーダーの白藤だってお前たちと戦ったときは本気じゃあなかつたっぽいぞ」

「え？ あんなに強かったのにですか？」

「ああ。だってお前たち、生きてるもん」

「あ」

そうだ。淳たちは生きている。もしも彼が最初から本気を出していたのならば。もしも彼の心に一切の迷いがなかったのならば。以前雄二が受けたその斬撃を。否、それ以上の斬撃を受けたに違いない。実際、白藤は当たれば相手を一撃で真つ二つにするような斬撃を出すことができる。それも、連

発して出すことすら苦ではない。赤羽との戦いでも何度も出していた。まあ、赤羽は当たらなかつたが故に真つ二つにならずにすんだが。

「ま、ともかく一週間くらいかけてプランを練ってくるよ。それまではとりあえず今の修行をもうちよいきつくしたので行こう」

「えー、きつくなるんすか」

「なんだ？　じゃあそれ以上強くなれないぞ。強くなるには同じことを繰り返してるだけじゃあだめだ。どんどんステツプアップしていかないとな」

「はい、わかりました」

「ちえー、わかりましたよー」

「よし、じゃあ今日は帰るか」

「はい」

「はい」